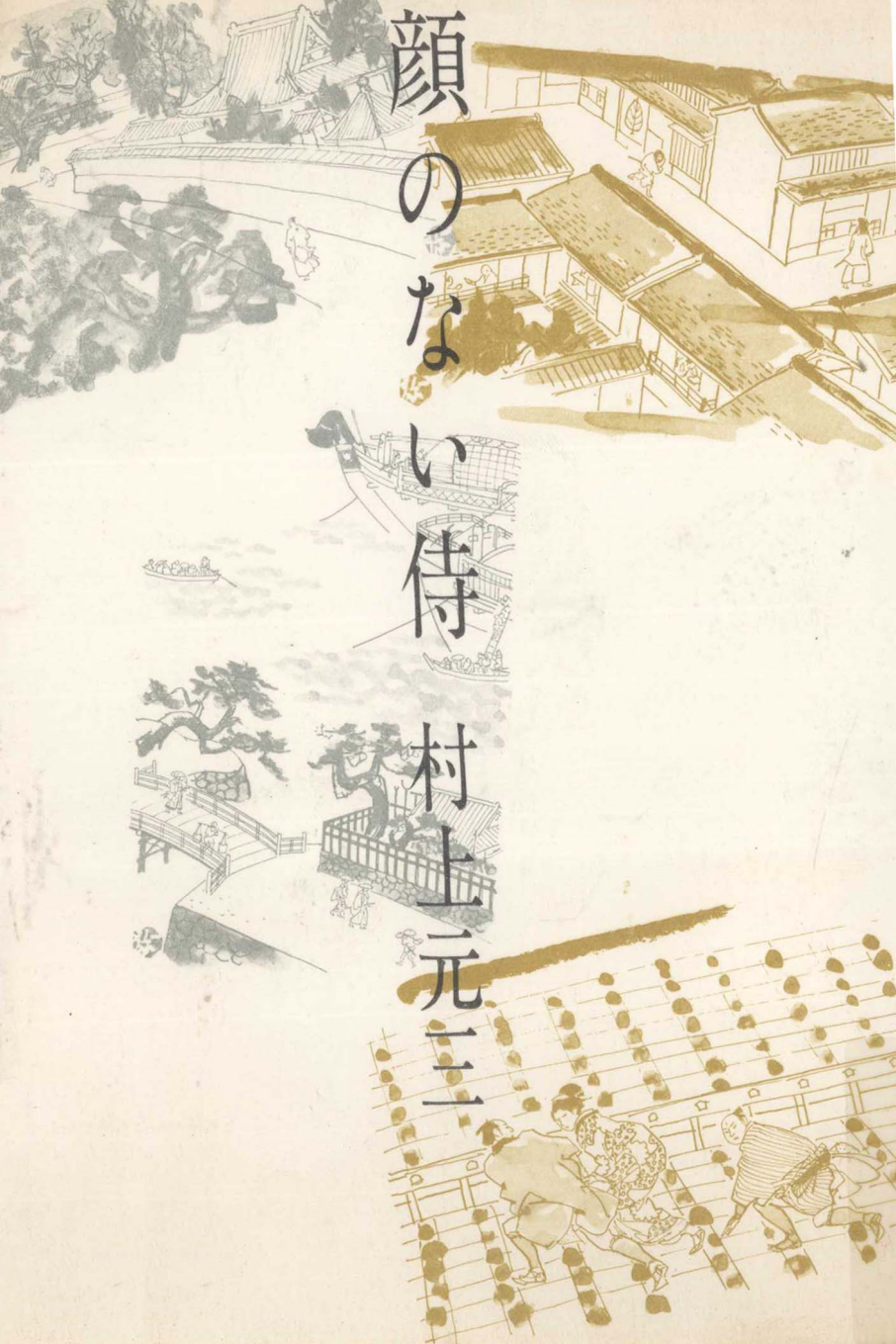


顔のない侍村上元三



顔のない侍

村上元三

東京文芸社



顔のない侍 ￥380

昭和四十一年十二月五日印刷
昭和四十一年十二月十日發行

著者 村上元三

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

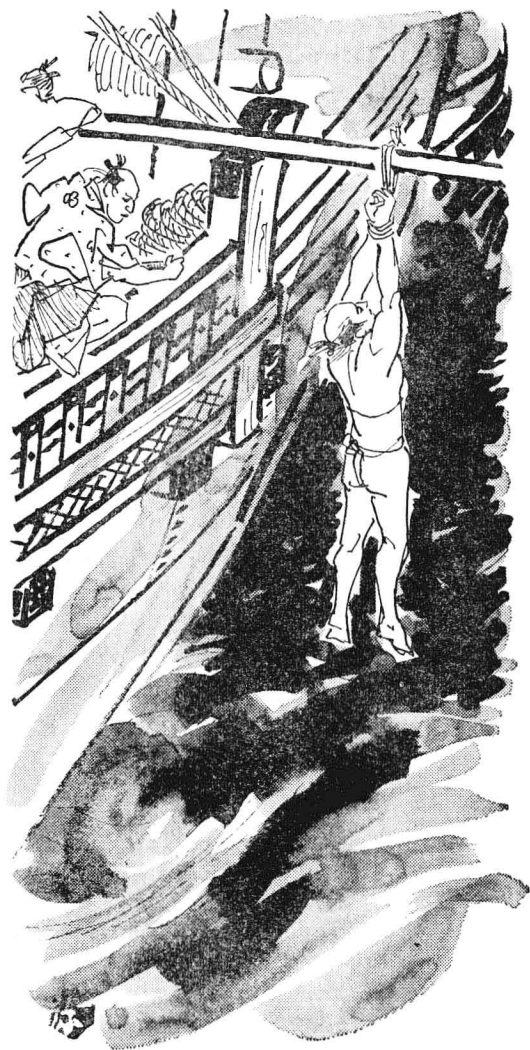
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

顔のない侍

目次

第一話	読後火中の事	五
第二話	赤い黄金	五
第三話	股旅音頭	二九
第四話	伏見の狐屋敷	一六
第五話	鯨の茶碗	三二

第一話 読後火中の事



いま、舷から海へぶらさげられようとしているその侍は、下帯一つの裸であった。

船上には灯明りは全くないが、かさをかぶった春の十日ほどの月が、ぼんやりと光っている。夕方まで風が強かったので、まだ波のうねりは大きい。

船首に三つ葉葵の船印を立てたこの船は、幕府の御用船で、五百石積ほどはある。駿河の清水港を出た筑波丸は、陽が暮れたころ品川の沖を通過し、袖ヶ浦を左舷に見ながら、大川の河口へ近づいているところであった。

「申し残すことはあるまいな」

襷をかけ、袴の股立をとった侍が、裸の侍へ向って話しかけた。大目付新庄能登守の下役で、三枝大蔵というこの旗本は、据物斬の腕前は拔群、と言われている。

「もっとも、もはや何を申しても、無益だが」

と三枝大蔵は、自慢の備前物の大刀を左に提げ、含み

笑いを洩した。舷から、五人ほどの侍の手で、太い腕木が海のほうへ突き出されている。下帯一つのその侍は、腕木に両手首を縛られて、だらりとぶらさげられているのであった。

おぼろな月明りを浴びた侍の身体は、肉が締って、たくましい。きれいに月代を剃り、年のころは二十五か六であろうか。面長で、秀でた眼鼻立をしている。手首に縄が食い込むのか、ちょっと太い眉のあたりをしかめたが、それでも裸の侍は、さっきから顔に浮べている微笑を消さない。

波のうねりで、ぐるりと自分の身体が廻ったとき、裸の侍は船の上を見渡し、笑い声を立てた。それも、いのちを取られる前の自暴自棄から出たようではなく、ひどくさわやかに響いた。

灯の色のない船上に、床几を据え、陣笠に馬乗羽織の侍がひとり、波のうねりを両足でこらえながら腰をおろしている。笠の下顔はよく見えないが、身体つきの大きな、身なりの立派な人物であった。

十代將軍家治を補佐している田沼主殿頭意次をはじめ五人の老中も、この大目付の新庄能登守には一目おいて

いる、と言われる。政略を弄するのが好きで、諸大名たちの動静もいちいちよく知っている上に、下情に明るく、腹心の家来たちも多い。

その新本能登守が、十日ほど前、幕府の御用船に乗って駿府まで公用で出かけて行ったのに、わざわざ夜になつてから江戸へ帰ってきたのは何故なのか、幕閣の重臣の誰もが知らないことであつた。

「何を笑う」

と三枝大蔵は、かつとしたらしく、舷から半身を乗出し、大刀を腰にさした。新本能登守の合図があり次第、裸の侍を海中へ斬り落す構えであつた。

「待て」

ゆっくりと大蔵を制して、能登守は床几から腰をあげ、舷へ近づいてきた。

船子たちは、この場を見てはならぬ、と言い渡されているのであろう、船尾に固ったり、あるいは胴の間に入ったりして、帆柱からこのあたりにかけて、船子たちの姿は見えない。

陣笠の下から能登守は、裸の侍に眼をそそぎ、風に逆らつて声をかけた。

「伊勢小弥太と申すそのほうの姓名も、これで海の中に消える。今日までの働き、なかなか美事であつたが、そのほう、役目を踏み外した。依つて、大公儀ご重役方のお憎しみ、並々ではない」

能登守の顔半分は、月明りがさした。ふっくらとした頬のあたり、高い鼻などが、ぼんやりと浮きあがつて見える。

「この船から逃げ出そうなどと致したゆえ、やむを得ぬ。わしの面前にて、三枝大蔵の手で仕置きをする。胴の間に、こわい人が控えておられること、わかつておろうな。いのち乞いをしてつかわしたいところなれど、もはやわしの力では及ばぬ。誰も恨むな。そのほうの心がらゆえだぞ」

「心得ております」

伊勢小弥太と呼ばれた裸の侍は、息切れもせず、腕木に吊されながら、はっきりと答えた。

「隠密の家に生れ、隠密を役目として働いて参つた人間の最後にしては、思い残すことはござらぬ。大目付新本能登守様のご検視を受けて、江戸の灯を眺めながら死にますのゆえ」

小弥太は、顔をねじ向け、袖ヶ浦のほうを見た。芝の田町あたりであろう、おぼろな月明りの向うに、ちらちらと町家の灯が瞬いている。

「では、覚悟」

と三枝大蔵は、舷から半身を乗出し、左手で腕木をつかんだ。

それまで黙々と見ていた五人の下役は、めいめいの顔を逸向けた。返り血を浴びないように、五人とも腕木からなるべく身体を離している。

「南無阿弥陀仏」

伊勢小弥太は、大きな声を出した。

それを待っていたように、大蔵の腰から刀が閃めき、月明りを薙いだ。

抜打ちに大蔵は、小弥太の首を刎ね、すぐに切り返して、小弥太を腕木から吊してある縄を断った。瞬き一つしないうちの、早業であった。

能登守は、大きく眼をあいて、それを見ていた。五人の下役のうち、小弥太の首と胴がべつべつに暗い海中へ落ちて行くのを、はっきり眼にした者は三人ほどしかない。

腕木のところに、縄がぶらさがって揺れているきり、首胴を異にした小弥太は、すぐ水に吞まれてしまい、水の音も聞えなかった。大きな海のうねりが、船腹を洗っている。

五人の下役は、すぐに腕木を取片づけ、舷に返り血がついていないか、月明りで調べた。

「何事もなかったな」

と新庄能登守は、舷から海面を見おろしながら、「何事もなかったのだ。船の者たちにも、さよう申しておけ。伊勢なにがしと申す身分の軽い旗本、気が狂うて海中へ飛び込んだ。夜のこともあり、しかもこの波ゆえ、助けることも叶わなんだ」

「はい。その通りでござる」

と三枝大蔵は、血刀を拭いながら、低く答えた。そのうしろから、鍔頭巾で顔を隠した侍がひとり、胴の間の戸をあけて、船の上へあがってきた。身体つきも小さく、痩せて、もう六十を越しているであろう。

「片づいたか」

鍔頭巾の侍に訊かれて、能登守は陣笠を外し、小腰をかめると、

「仰せつけの如く致してござる」

「胴の間の入口から見ていた。これでよい。これで、田

沼主殿頭、手も足も出なくなるうな」

と鍔頭巾の侍は、かすかに満足そうな笑い声を立てて、

「したが、伊勢小弥太と申す者、わしに手証を押えられていたとは、思うてもおらなんだであろうな」

「御意」

能登守も、軽い笑い声を立てて、

「まさかに品川から、ご老中が小舟でこの船へ乗って参られる、とは小弥太も考え及ばなんだと存じます。駿府城代の悪事を探り出したのゆえ、江戸へ戻ってから恩賞にあずかる、と申うておりましたろうからな」

「大川の河口で、わしは船をおりる」

そう言った鍔頭巾の侍は、江戸幕府の五人の老中のうち、田沼主殿頭と一ばん仲の悪い松平越中守忠高であった。

伊勢小弥太という、田沼主殿頭の腹心で、隠密の役目にかけては旗本随一、と言われる若い侍が、裸のまま海中へ斬り落とされたことなど、全く知らなかったよう

に、御用船の筑波丸は、隅田川の河口のほうへ、波のうねりに乗って進んで行った。

河口で碇をおろし、老中松平越中守が、河口で小船に乗り移り、陸地へ戻ったあと、筑波丸の船上に、ようやく灯が入った。清水から積み込んだ荷を、船上へ運びあげる仕事が始ったからであった。

「能登守様」

と、三枝大蔵は、誰にも聞えないよう、支配役へささやいた。

「これで伊勢小弥太は、この世から消え去りましたな」

「さよう」

寒くなってきたのか、新庄能登守は、懷中から頭巾を出してかぶりながら、やはり低い声で、

「小弥太の死骸、首と胴がべつべつに、今ごろは海中に沈んでいることになる」

「代りの首と胴は、すでに用意をして、海に流してあります。仕置場から、なるべく小弥太に似た顔、同じような背恰好の男を探すように、と千阿弥や三つ目小僧に申しつけておきました。万一、漁師の船が死骸を見つけた、というようなことになりましたは、越中守様のこと

ゆえ、お疑いなさるやも知れませぬ」

「そのほうのように、市井の無頼の輩まで手下にしている家来を持っておると、わしも重宝をする」

「おそれ入ります」

「それにしても、最前の据物斬の手並、鮮やかであったな。胴の間の入口からのぞいておられた越中守様にも、小弥太の胴と首が分れて海へ落ちた、と見たたであらうな。下役の五人とも、その通りだ」

「しかし、小田切重助だけは油断がなりませぬ。あの男、平常はあの通りでございますが、なかなか眼が利きます。伊勢小弥太の身のこなしの早いことも、よう存じております」

「気がついたようなれば、小田切を斬れ」

「はあ」

と答えたが、三枝大蔵は、あまり気が進まないらしい。ことし二十六歳、まだ独身で、武芸以外にこの世の中で何も楽しみがない、と思われている侍だが、大蔵は、理由がないのに人を斬るのは嫌いな男であった。背が高く、ちょっと見ると間が抜けているほど、顔は長い。色は黒いし、女には縁がないし、自分でも女嫌い、

と言っている。

「さて」

新庄能登守は、船上から人家の灯明りを眺めながら、そっと呟いた。

「伊勢小弥太、明日から顔のない侍になるわけだな」

「そのほうが、小弥太も働き易かるう、と心得ます」

と、大蔵も答えた。

「それがしも今宵かぎり、小弥太とは縁を切りたい、と存じます。田沼様の腹心と一緒に働いて、おのれのいのちを縮めるほど、それがしも向う見ずではござりませぬ」

二

三つ目小僧という異名があるのは、本所三つ目に癖のあるのと、一つには、額の真中に古い刀傷が残っていて、正面からこの男の顔を眺めると、ちょうど三つ、眼があるように見えるからであった。

親から貰った本当の名は三次というし、この男は何んでも三という数に縁起を担いで、博奕場でも賽ころの三が出ると、ひどく喜ぶ癖がある。

額の傷は、十年ほど前の喧嘩で、對手からつけられた刀傷であった。定まった職というのは手につけていないが、何をやらしても器用で、その代り、もつ、そう飯の味も知っている。人殺しと泥棒だけはやったことがない、という癖に、人の家へ忍び込むことなどには妙を得ていて、岡っ引の手先を勤めるには向いている。顔が丸く、べつに醜男というほどではないのに、遊びの場所でも女にもてたことがない。

どこで金を作ってくるのか、いつも小判を十枚ほどは懷中に入れているのが、かえって女に薄気味悪さを感じさせるからであらう。

「姐さん、どうも妙なことになるってきた」

と三つ目小僧の三次が、吉原に近い馬道の桔梗屋という小料理屋の帳場へ飛び込んで来たのは、風の無い、いい天気の子すぎであった。

「伊勢小弥太様のお屋敷で、不思議なことがありましたぜ」

「小弥太様が、どうしたんだって」

化粧をしていた女あるじのお紋は、急いで肌を入れながら、奥から帳場へ出てきた。二十一だというのが、お紋

は年よりも老けて見える。この馬道で桔梗屋という小料理屋をはじめたのは二年前で、お紋の前身は誰も知らない。色町の出か、と思うと、妙に固苦しいところがあるし、男を知っているのか、まだ娘なのか、ここへ通いつめる客にも見当はつかない。

色は浅黒いが、鼻筋の通った、切れ長の眼をしたいいい器量で、お紋は六人の女中と板前ひとり、ほかに料理職人を三人、下足、出前持、と十二人の男女を上手に使っている。店も馬道の往還に面して、階下は広い土間に小座敷が二つ、二階は座敷が三部屋、という造りで、調度や皿小鉢にも金がかかっていた。

よほど裕福な旦那がついているのではないか、という評判だが、お紋は旦那らしい男を一度も店へ引き入れたことはないし、全く尻尾を見せないで、店は繁昌している。

「小さな声で、お話し」

とお紋は、店を掃除している女中たちのほうへ、ちらりと眼をやってから、

「ここで小弥太様のお名を出すのは禁物、と言ってある筈だ」

「へい、どうも相済みません」

藍微塵の素袷に平紵の帯、という、遊び人の姿をした三次は、声をひそめて、

「仲間の野郎の話では、小弥太様は先月、東海道のどこかへお出かけになったんだそうで。それが三日前、不意に江戸へ帰っておいでなすったのはいいが、なんと、下帯一つの裸で、しかも首と胴が別っこに、袖ヶ浦の海に浮いていた、というんですが」

「そうかえ」

べつにお紋は、びっくりした様子もなく、櫛で髪の毛を梳きあげながら、

「それで、お屋敷のほうは」

「さっき、牛込矢来下のお屋敷の様子を、ちょっとのぞいて参りました。ところが、表の門の戸には、太い青竹がぶちがいに打ちつけてあるし、お袋様のお姿も見えません。近所の旗本屋敷に、博奕仲間のお目がおります、そいつの話では、伊勢小弥太様はお役目のことで不始末があり、お咎めを受けた、と言うんで」

小弥太様のお母様も、どこへおいでになったか、わからないんだね」

「へえ。噂では、母子諸共、人知れずばっさり、という憂目にお会いなされたんじゃないやあねえか、と言うんですが、実のところ、三日前にあっしは、猿楽町の親分から頼まれて、仕置になった死骸を一人前、そつと非人から買いました」

「猿楽町の親分の言いわけでは、年のころ二十五か六、いい男で、がっしりした身体つきの死骸という注文だったんだらう」

「おや、姐さんは、それをご承知で」

「小弥太の身替りの死骸が一つ、入用だったのさ。猿楽町の親分は、三枝大蔵様からお言いつけを受けたに違いない」

「やはりそうでしたか」

「小弥太様は死んでしまった、と見せかけたのだから、こんどのお仕事は、並大抵のことじゃあなからうね。役目の上で不届があった、と言ったところで、伊勢小弥太様のお家は、ご先代から無役の小普請、しかも小弥太様は、隠密の仕事をなすっていたんだもの。わざわざ麗々しく表戸に青竹を打ちつけ、閉門などというご沙汰が下る筈はないさ」

「姐さん」

店と板場のほうをのぞき、三次はお紋のほうへ膝を寄せると、

「だからあつしは、前々から心配していたんだ。大きな声では言えねえが、ご老中の中でも飛ぶ鳥を落す勢いだ、賄賂取りで評判の悪い田沼様などの下で働いていると、ろくなことにはならねえ、ってね」

「小弥太様には小弥太様で、立派にお考えがあつてのことさ」

とお紋は、じつと考えていたが、

「今夜、呼び出すかも知れない。お前家にいておくれ」

「へい、よろしゅうございます」

三つ目小僧の三次は、そのまま桔梗屋を出て行った。

身じまいをしたお紋は、階下の自分の居間へ戻ると、押入を開けた。すつと押入へ入ったお紋は、唐紙を閉め、床板をあげた。

その下は、十段ほどの細い段梯子になっている。慣れた足取りで、お紋は段梯子をおりた。おりたところに、こんどは板戸がある。暗い中でお紋は、手さぐりに板戸を開けると、こんどは上へのぼる細い段梯子がついてい

た。

そこをあがると、また板戸があつて、その中は六疊敷ほどの座敷になっている。外から見ると、桔梗屋の建物は何んの変哲もないが、こうやってお紋の居間から地下の抜穴伝いに、裏手の一軒家に通じるようになってい

る。

その一軒家は、表は鍛冶屋で、親方や職人が朝から音を立てて働いているし、少しも怪しい節はない。しかし、鍛冶屋の親方や職人と見せかけた男たちは、実はお紋のために働いている連中であつた。

「おや、もう見えていたんですか」

鍛冶屋の裏手にある部屋へ入ったお紋は、ほつとしたように声をかけた。

「首と胴が、べつべつに海に浮んでいたお人にしては、大そうなけ方だこと。それとも、お前様は伊勢小弥太様の幽霊かしら」

「その通り」

と、六疊の間で仰向けに臥ていた男は、起きあがりながら笑つた。

この部屋は、高いところに明り窓があるきりだが、壁

の一部が、い、返しになっていて、家の横手へ抜けられるように出来ている。

伊勢小弥太は、町人の髷に結い変え、身幅の狭い素衿を着ていた。

「どういうわけで、こんな」

「おれは、三日前の晩、死んだ男だ」

と小弥太は、屈託のない表情で、

「三枝大藏に、御用船の上から裸で海中へ斬り落された。首と胴が別々に落ちた、と見せかけるのは何んでもないことだが、ご老中の松平越中守様も船の胴の間からのぞいていたのでな。春の海があんなに冷たいとは思わなかった」

「なぜ、殺されたふりをなさるんです」

「田沼様のために働き過ぎて、松平越中守様に睨まれたのだ。これからは大目付の新庄能登守様も、表立っておれをかばって下さるわけには行かぬ。三枝大藏とて、同様。そなたと三つ目小僧の三次、神田猿樂町の親分ごと、面作り師の千阿弥、三人だけがわしの味方だ。それも、三人の返辞次第がな」

「これから、どうなさるのです。どんなお仕事を、あな

た様は」

「働き易くなった、とも言えるし、働き難くなった、とも言える」

と小弥太は、にこりと笑って、明るい声でつけ加えた。

「おれは、顔のない侍になったのだから」

三

「とつつあん、こないだの錠前、直っているかえ」

鍛冶富、と大きく書いてある油障子を開け、土間に入ってきた今日の三次は、煉瓦格子の袷に、得意先から貰ったと見える印絆纏を引っかけた堅気の職人の身なりであった。

遊び人仲間では、三つ目小僧という異名をとった額の傷のところが、くっきりと赤く目立つのは、朝から酒を飲んでいからであらう。

「あいよ」

鉄挺を動かしながら、この店の親方富藏が顔をあげ、ちらと三次へ眼配せをした。